印刷　アオヤギ株式会社　福岡市中央区渡辺通二丁目9-31

福岡大学 医学会ニュース

No. 48

福岡大学医学会　福岡大学医学部内

平成十六年 筑紫病院が目指すもの

福岡大学筑紫病院長　田中　彰

筑紫病院の病院長を拝命して四ヶ月が経過しましたが、山積する問題の大きさ、多さに唖然とするばかりです。しかしこれらに対し、臆することなく立ち向かう覚悟はできております。

筑紫病院の最も大きな問題点は、病院の存在理由が、開院以来、曖昧模糊のままであり、それが、院内、大学、医学部、医師会との協議の中で常に障害になっていることであります。開院当初の議論はともかく、病院の存在意義は、今からでも、現場の人間が作り上げていくべきものと考えます。卒後教育や臨床的研究もさることながら、その中核になるものは、『地域医療に徹する』ということであります。地域医療機関との病診・病病連携をはかって、高度医療、二次・三次救急医療に専念することであります。しかし、過去十八年間なかなかできなかったこれらのことを実践していくためには、職員の意識改革、病院の構造改革が必要となります。

今年度のメインテーマは、救急体制の確立であります。昨年六月より医師会の二次救急医療輪番制に参加して以来、少しずつ、雰囲気がよい方向に変わってきております。これをバネに、救急部のハード、ソフトを整備していき、平成十七年春からは、救急部を中心として三六五日二十四時間救急体制つまり「救急告示病院」になりたいと考えます。そのためには、救急部スタッフの増員とともに「医療連携室」の強化もしなくてはなりません。当面、昼も夜も救急車を積極的に受け入れていくことであります。

この救急医療の強化を核にして、行政より「急性期特定病院」さらには「地域医療支援病院」の指定を受けたいと考えます。これには紹介率、在院日数、入院外来比など多くのハードルを乗り越える必要があります。

また外部の専門家つまり経営コンサルタントに、病院全体および各診療科の収支を含めた諸データを集積・分析してもらい、それらを参考にして、個々の診療科に強く改善を求めねばなりません。同時に、診療費包括化のシステムに乗ることを目指したいと考えます。これに乗れれば、財政的基盤はより強化されますが、当然、より厳しい経営努力が求められます。

このような医療改革を推し進めるためには、診療体制も再編成しなければなりません。平成十五年一月に満留医学部長を委員長に医学部、福岡大学病院、筑紫病院の十名の委員より成る「筑紫病院将来構想検討委員会」でまとめられた「答申書」が学長に提出されましたが、それをベースに「筑紫病院の将来構想」の具体案を今作っております。今後、医学部、大学と折衝を重ねて、平成十六年度中には結論を出したいと思っております。財政的基盤の強化を図るためには、いかに特化するかが問題であります。一定期間見て、診療態度に改善がみられない診療科は、縮小ないし廃止せざるをえず、難しい決断を迫られるものと覚悟いたしております。

次に問題となるのは、医学部との関係をどう保つかであります。医学部、福岡大学病院、筑紫病院は、並列に並び、それぞれが経営責任を持つべきだといわれるなら、筑紫病院は医学部と横のパイプを持ち、医学部の最高意思決定機関の一角を占めるべきであると考えます。教育、研究という大学病院としての機能を維持していくためにも絶対に譲れない点であります。

今回の薬事法改正により、医療機関・医師が主体となって行う治験ができるようになります。従来の未承認薬物の提供を受けて行う臨床試験に加えて、未承認薬物を外部に製造委託し、行う臨床試験や既承認薬を用いた、適応外使用に関する臨床試験などが可能になります。まずは、治験管理体制を整備しながら、やがては、臨床研究センターを目指したいと考えます。さらに、国立大学病院・国立病院並みに、採用薬品の五十%前後は先発品から後発品（ゼネリック）に切り替えて、薬価収益を上げるよう努力していきます。

社会環境の変化に伴い、医療を取り巻く環境も大きく変わろうとしています。今「IT医療革命」の時代が凄まじいスピードで進展していく中、医療の再構築、とりわけ医療操作の現場における自らの再構築が求められています。

当院もこの潮流に乗り遅れることなく、平成十七年一月の稼動を目指して、電子カルテシステムを中核とした医療情報システムの構築を計画しています。もちろん将来構想（新病院）を念頭において、費用対効果と優先度を勘案し、段階的導入を進めざるを得ません。今回のシステム構築は将来予定される新病院での本格的な電子カルテシステム運用の試行期間と位置づけています。院内共通意識のもと、一致協力して取り組むつもりでいます。

最後に、これまでも改革は行われてきましたが、どちらかといえば、問題点や不備な点を修正しただけで、本当の戦略を実施するのはこれからだと思っています。今後は医療を担う人材の確保と資質の向上（あるべき知識・技術・倫理の徹底を図る）、医療安全対策の充実、患者に対する情報提供の促進、医療計画の見直しなど量から質への改革を確実に行わねばならないと考えています。そのためにも職員全員が一つのチームとなって、意欲と責任感を持って、大学病院としての真の組織にこの病院を変えていく、これが私の責務であると思っています。

第30回 医学部慰霊祭

第三十回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、御遺族並びに御来賓の方々、本学教職員と学生約二五〇名が参列し、平成十五年十月十八日（土）午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された十柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた八十柱、合わせて九十柱でした。献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、満留昭久医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて九十柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。

新風

平成15年10月1日付けで本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。

手術部教授　山下　裕一

このたび、福岡大学病院手術部教授に昇進いたしました。第二外科における診療は兼務となりましたが、従来通りの診療を致しています。平成六年に福岡大学医学部外科学講座第二の助教授として白日高歩教授のもとに赴任して十年近くが経過しました。この間、消化器外科領域における内視鏡手術の開発とその臨床応用ならびに術者育成を目標とし、現在、教室では多くの消化器外科専門医資格を有する医師が育つようになりました。

私自身の経歴は、昭和五十一年に久留米大学を卒業し、外科入局と同時に自治医科大学消化器一般外科レジデントに応募し、計八年間関連病院出張を含む臨床教育ならびに静岡薬科大学での研究などを経て、再び久留米大学病院外科に戻りました。出身母校を飛び出しての自治医大外科研修医・レジデント時代は、後に東大外科教授となり昭和天皇の手術を執刀された森岡教授に直接手術や研究の指導を受け、関連病院出向時代には同じ釜の飯を食った仲間をもつことができ、現在もスクラムを組み、また競い合える同僚に恵まれました。

平成十六年度から始まる新卒後研修制度は、出身母校にとどまらず広く全国の研修病院に出てゆくチャンスが開かれています。この制度の是非はともかく、過去に経験したはつらつとしたレジデント時代を思い起こします。研修医や学生の諸君には病院業務の相談のみならず、研修についての相談に積極的にのりたいと考えています。遠慮なく相談に訪れてください。

筑紫病院内科第一教授　浦田　秀則

私は昭和五十五年本学を卒業した第三回生です。循環器系疾患が増加するのでは？とその当時感じ、荒川教授率いる第二内科へ入局しました。二年の臨床研修後大学院へ進学し、高血圧患者に対する軽強度運動療法の降圧機序のテーマで学位をいただきました。循環器医員を経て、米国オハイオ州のクリーブランドクリニックへ六年半、引き続いて独国ベルリンのマックス・デリュブルックセンターへ三年間留学させていただきました。帰国後、福岡大学病院内科二の助手・講師を経て、筑紫病院循環器科へ平成十四年四月より移動し現在に至っています。

卒業時に感じたとおり救急医療を含めた循環器科関連の患者さまは増加しています。血管の動脈硬化による疾患は発症まで無症状のことが多く、ある日突然発症し救急搬送されてきますが、実際の病態は生活習慣病(高血圧、高脂血症、糖尿病、肥満等)を基盤にして長い時間をかけて進展しています。したがって、現在の循環器科の主な仕事は生活習慣病の管理(一次及び二次予防)と救急疾患の加療です。私はこの両方の病態進展に関与するレニン・アンジオテンシン系を研究してきました。特に、ヒトの心臓から抽出したアンジオテンシンII産生セリン酵素であるキマーゼの阻害薬を開発中であり、動物実験では心不全や心筋梗塞の予後を改善し、動脈硬化の進展を遅延させるデータも得ています。可能ならば、臨床試験を行っていきたいと思っています。今後とも本学の循環器科や同窓会との関連を密にし、臨床と研究の両面をまかなえるような人材を育成し、地域医療へ貢献したいと思います。

昨年十二月からは筑紫病院副院長も拝命し、若輩のせいで多少昏迷しております。筑紫病院は創立十八年を経て変革の時期を迎えています。福岡大学構成員のひとつとして、しかも筑紫病院の歴史に基づいた変革ができればと田中彰院長を補佐していく覚悟です。院長からはよい雑巾になれと承りました。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

麻酔科学助教授　仁田原　慶一

出身は福岡で高校までを福岡で過ごしました。一九八五年に防衛医科大学校を卒業し、南極観測船しらせの乗船をめざして海上自衛隊に赴任しました。卒業後は防衛医科大学病院とその関連施設の麻酔科で勤務しました。自衛隊在籍中、一九八七年から二年間は潜水医学の研究施設で、深深度潜水(三〇〇m位の深度の飽和潜水)のダイバーに与える影響といった自衛隊ならではの研究を、一九九一年から二年間は、米国アルバートアインスタイン医科大学モンテフィオーレメディカルセンターおよびハンガリー国立医学研究所に留学し、筋弛緩薬の薬理と、神経筋接合部を含めたコリン作動性神経におけるATP、アデノシンの作用について研究をしました。そのまま在職していれば、今頃はイラク復興支援事業で砂漠の上にいたかもしれません。一九九七年に自衛隊を退職し、縁あって福岡大学麻酔科に勤務しています。福岡大学病院勤務当初は今まで勤務してきた他の病院と比較して、一麻酔科医に対する手術症例が多いことに驚かされました。現在、麻酔管理症例数の多さに流されないよう一症例ごとに綿密な麻酔管理の計画と実施をするように、また若手麻酔科医にもそのような指導を心がけています。豊富な症例から学べることを患者さんに還元していこうと臨床研究の計画、指導、実施にがんばりたいと思っています。よろしくお願いいたします。

循環器科講師　小川　正浩

島根県浜田市出身で、平成三年福岡大学医学部卒業後、福岡大学第二内科に入局しました。福岡大学病院、筑紫病院での二年間の臨床研修を終えた後、循環器科を専門とした臨床修練を開始し、三年目からは、福岡大学病院医員を始めとして関連病院で臨床修練を重ね、循環器、特に不整脈(臨床心臓電気生理)を中心に臨床の研究・研鑽を積み現在に至っております。その間ことに国立循環器病センター・心臓血管内科の専門修練医として昼夜・休日を問わず臨床また研究に明け暮れました。同センターでの心臓電気生理学的検査における心房ペーシング時の心房細動発生予防効果の機序と比較に関する臨床研究論文で学位を取得しました。また福岡大学病院に復帰後、心臓電気生理学的検査における心房受攻性の新しい指標を提唱した臨床研究論文に対し、日本心電学会学術奨励賞最優秀賞をはじめ福岡大学医学会・医学部同窓会などで望外の評価をして頂いたことが大きな励みとなりました。平成十五年四月より福岡大学病院循環器科朔啓二郎教授にスタッフとして採用していただき、現在も循環器診療にどっぷりと漬かっている毎日です。主に不整脈診療を中心としていますが、熊谷浩一郎先生をはじめ諸先輩の御教示に恵まれ、日常診療はもとより、特に難治性不整脈である心房細動・心室細動の最先端治療に携わり、大学病院として不整脈機序の解明と新しくより良い治療方法の発信を目標に日々精進する所存です。またこれを礎に、臨床・研究・教育に尽力出来ればと考えております。今後とも、御指導・御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

眼科講師　近藤　寛之

私の出身は東京都で、一九八八年に千葉大学医学部を卒業し、国家公務員共済組合虎の門病院に眼科レジデントとして勤務し、研修を受けました。一九九二年に、大島主任教授・林教授のご高配により、福岡大学に移籍し、一九九九年に福岡大学にて学位をいただきました。その間、マイアミ大学Bascom Palmer眼科研究所に一年半留学し、眼科手術に関する研究を行いました。その後は、一九九九年より二年間休職し、九州大学遺伝情報実験施設ゲノム解析分野(林健志教授、現生体防御医学研究所ゲノム構造学)に在籍し眼科疾患における遺伝子診断の研究を行っております。二〇〇一年に復職し、現在に至り、網膜硝子体疾患の診断と手術治療を専門に臨床に従事しております。特に専門外来である未熟児網膜症術後外来で、大里先生(講師)ともども小さい子供たちの経過をみております。

思い起こせば、福岡大で最初に主治医になった患者さんが未熟児網膜症の乳児でした。当時は主治医として必死の思いで小さい子供たちの手術が成功するよう、ご家族を励まし、逆に励まされ、医師としての研鑽を積んでおりました。既に当眼科学教室にお世話になること十二年が経過し、眼科分野の進歩を目のあたりに見てまいりましたが、今なおいろいろな治療困難な症例に出会っております。微力ではありますが、自分がこのような症例の診断・治療に少しでもお役に立てるよう、努力してゆきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

教室紹介

生化学

当教室は、一九七三年に生化学第一教室としてスタートした講座ですが、二〇〇二年の基礎系講座の再編により生化学第二教室が細胞生物学に統合されたのに伴って生化学教室は一つとなりました。

現在のスタッフは、黒木政秀教授、立石カヨ子助教授、黒木求講師、芝口浩智併任講師、山田博美技手と菊永理菜子秘書です。主な教育担当科目は、M2の人体機能学Ⅲ（生化学）と生体防御学Ⅰ（免疫学）、そして看護学校の生化学です。また院生として宇野宏一（眼科）、城田京子（産婦人科）、樋口隆男（二外科）、舌間朋美（眼科・現在米国留学中）、鉢嶺顕（二外科）が活躍し、また分子腫瘍学センターから廣瀬由美子技手とポスドクのアデル・バドラン（エジプト）が出向するとともに、研究生として内田博子（眼科）と張吉天（中国）が参加しており、四月からは衣笠哲史併任講師が新たに加わることになっています。

研究の方は、黒木（政）のグループは、腫瘍マーカー（CEA, MK-1, TSP-1など）の基礎から臨床まで手掛けており、一九八〇年代前半までは免疫化学的な手法で、各腫瘍マーカーの化学構造および抗原構造の解析と、その結果に基づく測定系の開発・改善を進めてきました。それ以降は分子生物学的手法（遺伝子工学）を取り入れ、腫瘍マーカーを標的にした癌の免疫療法および遺伝子治療を手掛けており、黒木（求）を中心とする腫瘍免疫学グループと芝口を中心とする分子腫瘍学グループが活躍しています。一方、立石を中心とするグループは、ペプチド生化学として消化管ホルモンを手掛け、これまでに新しいホルモンとして発見されたパンクレアスタチンの種々の病態における分泌動態や分泌機序を明らかにしてきました。現在は主として、グルカゴン様ペプチドー1（GLP-1）の分泌機序とリラキシンの卵胞成熟作用についての研究を行っています。

研究の厳しさの反面、レクレーションも盛んで、有志が集まっての釣りツアーやスキーツアーも恒例となっており、またテニスやゴルフ、あるいはダイビングやカラオケパーティーを楽しんでいる人もいます。所属講座を問わず研究設備の利用や研究技術の指導を開放していますので、院生の方に限らずどなたでもいつでも相談に来てください。また、学生諸君もいつでも自由に質問に来て下さい。

（URL:http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/biochem1/index-j.htm）

脳神経外科講師　継　仁

私は昭和六十年福岡大学医学部を卒業しましたが、学生時代はバドミントン部に所属し、趣味で油絵を描いていました。脳神経外科を選択したのは、大学五年の頃から授業などを受けるにつれ徐々に希望が強くなっていき、夏休みを利用して久留米の聖マリア病院・脳外科に一週間泊まり込みで見学に行きました。そこでの見学で小児脳外科に魅力も感じましたが、大学で広く基礎を学ぶことが必要と感じ、朝長正道前教授の教室に入局しました。入局当時は手術時間も長く、AVMの手術助手で二十四時間を超える手術にも付きました。その後microanatomyの知識や手術技術、機器の発達で、現在では二十四時間かかる手術はほとんどありません。

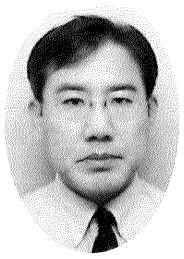
現在脳外科医として臨床以外に脳腫瘍病理を専門にしていますが、そのきっかけとなったのが大学院での脳腫瘍病理の仕事であり、平成六年には米国のMayo Clinicの神経病理部門で学ぶ機会を得たことです。岡崎春雄先生、Joseph E. Parisi先生、Bernd W. Scheithauer先生に臨床神経病理の教えを受けたことは、今でも大きな宝であります。臨床では、手術のみならず患者の側に立った臨床姿勢を朝長正道前教授、福島武雄教授より厳しく教えを受けました。医療不信や医療過誤が何かと問われる今日であり、この教えは一層重く感じられ、後輩の指導において受け継いでいます。これまで脳腫瘍、脳血管障害、脊椎脊髄の手術を一通り行ってきましたが、脳外科の中でも細分化、専門化が進み、現在は福島武雄教授の御指導のもとに下垂体腺腫の手術や学生時代の希望でありました小児脳外科を専門に行っています。今後尚一層、講師として、臨床、教育、研究に頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

神経内科・健康管理科講師　松永　洋一

一九八二年福岡大学医学部卒（五回生）。私は卒後すぐに徳島大学医学部第三内科（呼吸器）に入局しました。当時の教授が厚生省特定疾患アミロイド病の班長であったため数年間アミロイド病の基礎研究に従事していました。その後高松赤十字病院（呼吸器内科）に出向し三年ほど主に肺癌の化学療法、慢性呼吸器疾患の呼吸管理を中心とした臨床に従事しました。その後高知医科大学第一内科（消化器内科）に転勤し、そこでは当時注目を集めていた癌の免疫療法としてLAK（Lymphokine Activated Killer）療法を肝臓癌を対象として四年間臨床研究に従事しました。学位もここで頂きました。その後再び徳島大学医学部第三内科に転勤し約八年間今度はアレルギー性肺疾患、とりわけ気管支喘息における好酸球の病因的意義をプロテアーゼ、及びそのインヒビターの観点より研究（徳島大学酵素科学研究所との共同研究）していました。その後縁あってUCSF（Dr. S. Prusiner、一九九七年ノーベル医学生理学賞受賞）にてプリオン病研究に約三年六ヶ月間従事しました。以上のように経歴がめまぐるしく、多方面にわたりいろいろと経験させて頂き周囲の方々へ感謝しています。帰国後、二〇〇〇年十月より現在までは神経内科、健康管理科にて変性脳疾患、主にアルツハイマー病、プリオン病に関する臨床、研究に従事しています。これまでの経験を生かし、これらの疾患に関して、Made in 福大ブランドを世界に向けて発信できるレベルをめざし精進したいと思います。卒業時の記念植樹は大変立派に成長していますが、学生時代お世話になった恩師は現在その殆どがすでに退官されており、改めて時の流れを実感しております。

……

筑紫病院消化器科講師　八尾　建史



昭和三十三年八月十五日、長崎県島原市に生まれました。昭和五十二年に長崎県立島原高校を卒業しました。昭和五十八年に九州大学医学部を卒業し、東京女子医科大学の内科レジデントでみっちり臨床研修を行いました。その後どうしても消化器内科を専攻したく平成元年より福岡大学筑紫病院消化器科の研究生として入局しました。平成八年より同内視鏡部助手、平成十年一月より二年間の甘木中央病院出張を経て平成十二年一月より福岡大学筑紫病院消化器科助手、平成十五年十月よりこの度講師に任命されました。消化器内科学を専攻してからは主に、炎症性腸疾患の病態の研究や消化器内視鏡診断への科学的アプローチについて研究してきました。炎症性腸疾患については、免疫組織化学的手法を用いクローン患者の肉眼的正常粘膜にすでにマクロファージが増加していることを発見し、マクロファージの微小集ぞく巣が潰瘍性大腸炎と鑑別が困難な大腸クローン病を診断する際に有用な指標となりうることを報告しました。本知見は昨年の厚生労働省のクローン病の診断基準の一部に採用されました。最近はもっぱら消化器内視鏡の診断治療に明け暮れています。小生のライフワークの一つは内視鏡診断を科学的方法論にすることです。すなわち近年の電子光学機器の進歩により内視鏡を用い消化管のほぼすべての粘膜を観察出来るようになりました。しかし最新の電子内視鏡を用いても、科学に必要な大きさ、高さ、形状などの空間的計測はできず、診断に重要な色情報も計測することができません。最近、内視鏡メーカーと協力し、世界で初めて三次元計測ができるステレオ式電子内視鏡を開発し、三次元計測が高精度に可能であることを報告しました。色情報については、電子内視鏡画像解析や免疫組織化学的研究により、消化管粘膜の色調は粘膜表層の微小血管の密度と形態からなっていると推測しました。そして最近開発されたズーム式電子内視鏡を用いて胃癌の固有の微小血管構築を生体で初めて観察し報告しました。本知見はすでに臨床的に胃癌の早期発見や術前の範囲診断に有用であることが判明し臨床に応用しています。様々な知見を広く海外に発表していましたら昨年末に欧州のEndsocopyという学術紙から突然reviewの依頼が来ました。福岡県の郊外から世界に学術情報を発信すべくなんとかがんばっています。趣味は、最近は中年になってからみんなが遊んでくれませんので、ほとんどやっていませんがSCUBA diving、スキー、テニス、アルトサクソフォーンなどです。よろしくお願いします。

第49回 福岡大学医学会例会報告

日　時／平成16年2月25日(水) 17時から
場　所／臨床大講堂

【進行】集会幹事　三角　佳生

Ⅰ. 開会の辞　集会幹事　三角　佳生

Ⅱ. 会長挨拶　医学部長　満留　昭久 先生

Ⅲ. 福岡大学医学紀要第三十巻優秀論文賞授与式

受賞者　秋吉　浩美 先生
　　城下　豊生 先生

Ⅳ. 受賞論文の要旨講演

講演1　座長…比嘉　和夫 先生

Pulmonary Embolism after Gynecologic Surgery : Early Detection by Pulse Oximetry

秋吉　浩美 先生

講演2　座長…菊池　昌弘 先生

Detection of Human Papillomavirus DNA in Esophageal Carcinomas by Polymerase Chain Reaction and in Situ Hybridization, and Its Relation to an Overexpression

城下　豊生 先生

Ⅴ. 閉会の辞　集会幹事　三角　佳生

優秀論文賞受賞者 秋吉浩美先生（左側）、城下豊生先生（中央）

教室紹介　臨床検査医学

臨床検査は、病気の診断、病期の判定、治療方針の決定、臨床経過の観察、治療計画の変更、病気の将来の見通しなどを判断するための重要な指標です。病因の解明が進み、検査の種類が増加するにつれ、どの検査を組み合わせれば、より正確に病態を把握できるか、あるいは原因に対する直接的なアプローチをとることができて治療に反映させられるかが課題になっています。

臨床検査医学教室は一九八八年に新設され、初代の濱崎直孝教授より一九九三年に小野順子教授に引き継がれました。現在、内分泌・代謝、血液、神経、循環器を専門とするスタッフ七名、外科、膵島移植を専攻する医員一名より構成されています。臨床検査部（一般、血液、臨床化学、細菌、輸血、生理、遺伝子、緊急、循環、呼吸、筋・神経・脳波検査室などスタッフ約六十名）と共に、検査の精度管理を行い、臨床に役立つ様に各々の研究を基盤として多くの検査を提供しています。また検査相談室では各診療部と協力し、検査の選択から診断・治療への応用まで広く相談に対応しています。

溶血性貧血に関しては表現型から遺伝子診断まで一貫した診断システムを構築して高度先進医療の指定を受けています。また膵島細胞症の原因遺伝子解析や、糖尿病におけるミトコンドリア遺伝子異常やグルコキナーゼ遺伝子異常を含む遺伝子診断システムを持ち、学外からの依頼も多く、数多くの遺伝子異常を検出しています。

診療では学会専門医、認定医の資格で、全科からのコンサルテーションを受け、内分泌・糖尿病、小児科、循環器科では外来及び入院診療に参加しています。

学生教育においては医学部四年次には臨床実習に先だち、検査診断学の授業で、検査の方法、適応と解釈、異常値の出るメカニズム見学・移動採血車同乗などの講義十六限を担当し実習に駆使できるよう導入を行っています。また各臓器別講義実習で得た知識と統合し診断、検査、治療に関する基本を習得するため臨床統合講義を担当しています。五年次のBSL(Bed Side Learning)では三人程度の少人数グループでお互いに採血、尿、心電図、心エコー検査を行い、細菌染色や脳波の判読を実習し、輸血の実際を学ぶため赤十字血液センターを進められる体制づくりに今後も教室員一同努力していきます。

医療行政の変革に際して合理的な検査診断行い、特にreversed-CPCの実習は六年時までに学んだ医学を診断学という面から再統合できると学生から毎年好評を得ています。

学位取得

次の方は、福岡大学より医学博士を授与されました。論文提出による学位取得者（平成15年10月7日付け）

八杉　直子（学外者）
Comparative Study of Dobutamine Stress Echocardiography and Dual SPECT (Thallium-201 and I-123 BMIPP) for The Assessment of Myocardial Viability After Acute Myocardial Infarction

宮崎　亮（外科学第一助手）
Endoscopic findings of the duodenal papilla in patients with pancreaticobiliary maljunction

三好　立（外科第二助手）
Early-stage lung adenocarcinomas with a micropapillay pattern, adistinct pathologic marker for a significantly poor prognosis.

岩田　郁（内科学第三助手）
Effects of esophageal varices obliteration by endoscopic variceal sclerotherapy on asialoscintigraphy and liver function test

渡邊　繁幸（学外者）
Development of immunoassays for persistent organic pollutants in food.
1. Development of a competitive enzyme-linked immunosorbent assay based on a monoclonal antibody for a fungicide flutolanil.
2. Development of competitive enzyme-linked immunosorbent assays (ELISAs) based on monoclonal antibodies for chloronicotinoid insecticides imidacloprid and acetamiprid.

可児　富子（臨床検査医学研究生）
Urinary Excretion Deoxypyridinoline Increases after Gastrointestinal Surgery

坂本美代子（臨床検査医学研究生）
蛋白質比の相違がOLETFラットの腎機能に及ぼす影響